

---

# 狂王の異界黙示録

Luft sp

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂王の異界黙示録

### 【Nコード】

N4118BA

### 【作者名】

L u f t   s p

### 【あらすじ】

僕が眠りについてからどのくらいの年月が過ぎただろうか……暑さも寒さも感じない暗闇の中、突如として闇が割れ光が差す。そして僕は彼女の声を聞いた。「次に目覚める時も世界がお前に優しいことを祈っている……。」と――――。

## 狂王と北欧の主神（前書き）

ロスカラの熱が急に上がってきたので……鉄は熱いうちに打て！ということで投稿です。

まあ、期待はあまりしない方がいいです。

## 狂王と北欧の主神

———みんなが僕を忘れますように。

それで全て終わりの筈だった。かつてのように大切な人たちをこれ以上傷付けたくないという身勝手ながらも思い、僕は目覚めた地で眠りについた。

———おやすみ。……おやすみ。何度もしフレインするその言葉が途切れ、静かなる闇の中でただ独り。冷たくも暖かくもないこの空間に沈んでからどのくらい経っただろうか？ 一年、十年？ もしくは一ヶ月も経っていないのかもしれない。だってここには時間を告げる機械も音も存在しないから。

よくよく考えてみればこうして思考することすら久しぶり……いや、そもそも何故意識が覚醒していない状態で脳が働いているんだ？ おかしい。どうして目を閉じているのか開いているのかすら不明な暗闇は眠る直前と全く変わらないのに同化してしまった筈の手足の感覚、長さや重さまで把握ができる。絶対におかしい。また誰かが僕を見つけて掘り起こしたのだろうか？ それとも遺跡自体が崩れてしまい封が解けてしまったのか。ああ、ついには無音だった空間に音まで出現した。

とくん、とくん。と波打つ生命が鼓動する音。言うまでもなくそれは胸のやや中心から左側から伝わっている。……これは本格的に目覚める兆候かもしれない。ぴし、ぴしっ！と闇が罅割れて光が差し込む。そのとき初めて目を開いていることに気が付いた。

闇に慣れてしまったせい、瞳が光を忌み嫌い、瞼が自然に落ちようとする。だが、この光から目を背けてはいけない。漠然として、何の確証もないが、そう誰かに告げられた気がしてならない。

右手で光を遮り、指の間から罅割れた闇を見つめる。亀裂の大きく入ったガラスよりも圧倒的にもろく感じられたそれは手を伸ばして触れてしまえば直ぐにでも崩れ去って新たな扉を開いてくれるのだろう。

——だが、それでいいのか？ 元々誰かを傷つけないという願いから自ら眠りについた身。次に目覚める時、今度こそ僕は近しい誰かを傷付けてしまうかもしれない。だったらこのまま……

——次に目覚めたときも、世界がお前に優しいことを祈っている……。

……C・C・？ なのか。手を伸ばして止めた時、暗闇の中でそんな彼女の声が響いた。その声に対して口元から不思議と笑いがこぼれる。全く、君らしくない。眠っていて誰からも存在を忘れられた僕なんかのことを心配するんだったらルーシユの財布を心配してやれ。

緑色の長い髪をした少女の姿が一瞬浮かんで消える。おそらく次目覚める時、彼女にはもう会えない。確証も根拠も全くないけど第六感というべき予感がそう告げている。だから——

（ありがとうC・C・、生徒会のみんな……そして、世界を彩ってくれた親友たち）

さようならは言わない。また会えると信じているから。世界に反逆する皇子にも世界を変えようとする騎士にも。……もしかしたら杖をついたよぼよぼの老人になっているかもしれないけど、その時は精一杯に笑ってやろう。

闇の亀裂へと手を伸ばす。今度は迷いも躊躇もない。もしも自分が大切な人を傷付けてしまったらその時は世界か、自らの手で僕を淘汰する。今度は眠りにつくなんて甘えは許されない。だから、覚悟を決めろっ!!

————パリーン、とガラスが碎けるような音が反響し、左腕が闇を砕く。それを機として雪崩れ込むように注ぐ白き光。視界が全て白色に染まる。闇が光へと上書きされ、世界を塗りつぶす。そして完全に光の世界となったその瞬間、全てが変わっていく———!

「————うぶっ!———ご、がぼぼぼっ!..?」

肺から口へと空気が押し出されて巨大泡を作る。口に液体が流れ込んで声が出せない。どうやら海か湖か、どこかの沼か不明だが、水の中へと放りこまれたらしい。……って、冷静に分析してる場合じゃないだろ！！早く脱出しないと死ぬ！ 始まりはいつも突然という言葉を聞いた気がするが、突然過ぎて思考が追いつかない。最初の方に水を少し飲みこんだせいか、喉が痛む。あ、ヤバイ。泳ぎ方は覚えているのに身体が反応してくれない。長い間眠っていたため身体が動かないというのかもしれないが、どこか呪いのようなモノを感じる。……だから冷静に分析してる場合じゃなっ、うわっ！？

「む、妙に暴れる魚がいるかと思うたら……なんだ、人じゃったのかっ！？」

水中から引っぱり上げられると……質素なローブを着た片眼鏡のようなものをした老人が驚愕したように僕を見つめていた。手には長い杖を持ち、それを釣り竿のようにして身体を吊り上げている。どうやらこの老人に助けられたらしい。眼下には透き通る蒼色の湖。さっきまでもがいていた場所だ。

「しかし、おかしいのう……。何故ミールの泉に人間が溺れとるんじゃ……？」

ぶつぶつと呪文でも唱えるかのように独り言を繰り返す老人。その姿もあり、妙に魔法使いのように見えてしまう。……というかいままでぶら下がってなくちゃいけないんだ？ なるべく早めに降ろして欲しいのだがどこか言いづらい。その様子に気が付いたのか、老

人は「おお、そうじゃった」と忘れ物を思い出すかのような表情で声を上げ、僕の身体を杖で陸まで運んだ。軽そうな様子で頭をさすりながら笑っている老人の姿は恩人には申し訳無いが、どこか癪に障る。

「すまん、すまんのう。すっかりお主の存在を忘れておったわい。ほっほっほ」

「……いえ、別に。助けてくれてありがとうございました。あのままではたぶん僕はおぼれ死んでいたかもしれません。感謝します」

一礼すると、老人は「ほっほっほ、最近の若者にしては礼儀が鳴っておるのう。もっと感謝するがよいぞ」と心底嬉しそうに笑っていた。この人、どこか普通の人とは決定的に違うと思うのは気のせいなのか？ 左眼の片眼鏡？からは背筋が凍るような威圧を放っているし、何よりもその奥には紋章のようなものが浮かび上がっていた。そう、それはまるで自分や友の持つ『王の力』<sup>ギアス</sup>とよく似ていて……

「ほう。人間、この左目に気が付いたのか？」

ぞくり、背筋を嫌な汗が伝った。ひょうきんな笑いを上げていた老人は睨むような眼つきでこちらを視ていた。左目は奥の紋章が光り輝き、その形を浮かび上がらせている。

片眼鏡ではない。義眼だ。ガラスのような水晶の瞳。威圧と危険な輝きを放つは全てを見られているかのような錯覚を起こす。いや、



錯覚ではないのかもしれない。数々の記憶がフラッシュバックしてくる。

——————言っではならない言葉を高らかに叫ぶ、銀髪の少年。

——————王たる少年の勅命によって武器を取る兵士と町民。  
……大切な家族。

——————そして血まみれの母上と……————！

「——————やめろおおおおおおおおおとおおおおおっ  
……！！！」

「……っ、何っ!？」

老人が弾かれるように後方へと飛ぶ。それとほぼ同時に意識が戻る。ひどく動悸が激しい。呼吸も荒いのがわかる。そして左目が何よりも焼けるように痛みを訴えていた。触れると、熱した鉄のように熱い。どうやら無意識中にギアスを使ってしまったらしい。

その証拠に老人は啞然とした表情でこちらを見つめていた。ギアスをかけられた者に現れる目の周りの赤い線が右目の周囲を縁取っている。――――だが、効果が薄かったのかはっ、と直後我に帰る。

やってしまった。よりにもよってこの世界に来て初めて会った人、しかも命の恩人にギアスを使ってしまった……。最低だな、僕は。ため息が出る。謝ったら直ぐに此处から去ろう。そうだ、それがいい。

謝罪の言葉をかけようと老人に近づく。……すると、逆に老人が恐ろしいほどの速度で接近してきた。何故かその表情はヒーローを見る子供のような純真無垢だったが、正直薄気味が悪かった。そして口を開く。

「なんとっ、なんと素晴らしいっ!! このオーデインを退けるほどの魔力! こんな人間がいたとはわしもまだ視野が狭いということじゃな」

がしいと腕をきつく握られ、「お主どこの人間じゃ? どこでそのような力を身につけたのじゃ! ?」と初めての遊びに興味深々な子供のように質問攻めを食らった。……こ、このおじいさん見かけによらず握力が強すぎる。中々痛い。

顔が歪んでいることに気が付いたのだろう、老人は「すまん、すまん」と軽い謝罪をした後、こほんと咳払いを一つ。そして改めて視線をこちらに向けた。

「まあ、まどろっこしいのもなんじゃし……どうじゃお主――――  
――――わしの義兄弟にならんか?」

にっこりとそう言い放つ老人——オーディン。僕は思わず柄にもなく「はあああああっ!？」と大声を上げて叫んでしまった。

## 狂王と北欧の主神（後書き）

……さて、ハーレム系小説に真の一級フラグ建築士を入れたらどうなるのやら。

正直、予測があまりつきません。ヒロインは……未定。ご意見などくださったら幸いです。

## 狂王の契約

『————わしの義兄弟にならんか？』

唐突にそう切り出した老人、オーディンという名らしい。自らの力にかなりの自信を持っているのだろうか、どうやらギアスの力によって自らを跳ね退けた僕に興味を持ったらしく、城へと招待された。まあ、そこまではいいでしょう。あの泉から恐ろしく速い八本脚の白馬に乗せられ若干酔ったことも途中でわけのわからない形の生物を見たとしても全て些細なことだ。問題は……

「————と、いうわけじゃ。どうじゃ？ 北欧の主神たるわしの義兄弟になるつもりはないかのう、魔術師の少年」

「いやいやいやっ！？ どこが『というわけじゃ』ですか！？ まるで意味解りませんよっ」

それに僕は魔術師なんかじゃないし……これは言わないでおこう。僕を助けた質素なローブを着た怪しい老人は曰く、前の世界では北欧神話の主神であるオーディン様らしい。…信じると思うか？ 普通なら信じない。けど、何故か身なりはかなり質素なこの老人からは神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝であるシャルル・ジ・ブリタニアにも劣らぬ、いや勝る気迫を感じる。

しかも玉座に座るオーデインの周囲には多くの綺麗な女性が何人も。家政婦のようであるが、中には鎧を着た者もいる。何のまでは解らないが、艶のある炙られた肉や魚。色とりどりの果実や野菜など目の前にある豪勢な食事。この女性たちが運んできた。おそらく調理もそうなのだろう。

一方でオーデインは赤紫の液体、ワインしか飲まない。食事は同じく出されているのにそれらは全て足元に控えている二頭の狼が食べてしまっていた。しかし、それを怒るでもなくむしろ嬉しがるように笑みを浮かべて食事を終えた狼たちの頭をなでている。……食事を取らない何かしらの事情が有るのかもしれない。気にすることは失礼かもしれないな。

狼とオーデインの様子を一瞥し、食事に向き直る。まずは…肉から頂こう。と、丸太上の肉塊をナイフとフォークで切り裂き、小さくして口に運ぶ。

「!?!?……おいしい」

「ほっほっほ、そうじゃろう。そうじゃろう。何せ本来は誠の英雄  
にのみぞ許された極上の食だからのう。お前さんのためにわざわざ  
用意させたのじゃ、不味いなどと抜かしたら吹き飛ばしてくれるわ  
い」

「あは、…あはははははは……っ。それはどうもご丁寧に」

吹き飛ばすと笑い飛ばしながら豪語するオーデインに僕は乾いた笑

みしか出なかった。顔は笑っているがいちいち言葉から本気の寒気がする。その証拠に目覚めてそこまでの時経っていないというのに鼓動したばかりの心臓は既にばんばんと強く波打っていた。ホント、心臓に悪い。次は眠るの意味が違ってくるぞこれは……。

野菜に魚、果実、肉と進めていき辺りを埋め尽くすほどの食べ物はいつの間にか皿だけになっていた。食べきれるか心配だったが、眠っていた期間のせいかな案外あっさりと終わってしまった。皿やナイフ、フォークなどの小物を揃えて僕はパンっ！と合掌した。

「ごちそうさまでした。本当においしい食事をありがとうございました  
す」

オーデイン様に一礼し、周囲のヴァルクリアさんたちにも頭を下げる。……何故かオーデインはまたも初めて会った時のように目を丸くし、ヴァルクリアさんたちの何人かは顔を赤くしてうつむいてしまっていた。…僕って、何かした？ もしくはそこまで歓迎されてない……とか。

さすがに全部食べるのは拙かったのかな？ 貴族とかは食事を嗜むように食べて結構残す、ってことも聞いたことあるし……

不安が募る。だが、オーデインはそれを吹き飛ばすかのように豪快に笑って僕を見た。

「誠、おぬしには驚かされるのう。英雄たちとて食事には感謝するものの、それを作った者たちに礼などしわせんし、ましてや頭を下げることなど滅多に無い。ほっほっほっ！ これは何という逸材じゃ。ますますお主を家族にしとうなったぞっ！」

「え？　は、え？　これって普通じゃないんですか？……おかしいな、日本に居た時に作法とかも全て習った筈なのにどこかおかしかつたかな……？」

「それはおぬしの国の作法じゃろうて。此処では全く別じゃよ。…そういえば名前を聞いてなかったのう。食事の代価と言っては少し意地が悪いが、名を聞かせてはくれまいか？」

静かな口調で告げるオーディンに僕は一瞬考えた。別に名を教えるくらいどうってことはない。だが、彼はこうも言っているのだ。

『新しく家族になる者の名を知りたい』

と。前々から度々の発言からそう予測できる。というか先読みのようなものが頭の中に浮かんだ。

オーディンもそれに気が付いているようで試すような、調べるような義眼と右眼を向けている。

お互いに考えていることはバレバレのようだ。だったらこちらからも質問してやろう。

「それはオーディン様と同じ神の一族になれ、ということですよね」



「……………いかにも」

「それについては返答しかねます。僕にそれほどの価値が有るとは思えない」

「ほう……………」

断るのか？このわしの誘いを。とオーデインの眼光が瞳を射抜く。怪しく輝く紋章を浮かび上がらせた左眼から圧倒的な威圧が迸る！一瞬でも気を抜いたら簡単に意識を手放してしまうだろうその圧倒的な存在に真っ向から問答する。戦場での空気とよく似ている。苦手だが、嫌いじゃない。

自然と気分が高ぶることを実感しながら口を開いた。

「だけど僕には目的が有る。それが叶うのならこちらから頭を下げてでも貴方の一族となりましょう」

「その目的とは？ 一体何なのだ」

「……………この世界を全てを把握することですよ。そしてその為に普通の人間よりも時を永く感じていたい。……主神オーデイン、つまり僕は永遠にも匹敵する寿命が欲しいのですよ」

言葉を切る。真相はまだ伝えていない。これで運命が決まる。――  
――僕を永遠の命を欲する邪な魔道師と捉えてもいい。真に頭の切れる人間だったら答えることは決まっている。だが、このオーディンという神がもしそうではなかったら僕はおそらく処刑でもされるかもしれない。

これは賭けだ。そしてお互いの腹の探り合い。――――思えばチエスに似ているかもしれない。

一世一代の大博打の割には我ながら随分と余裕なものだ。改めてオーディンを睨む。神らしき威厳を感じる厳格な表情。そこから読み取るに――――答えは既に出ていた。隻眼の老神が口を開き、決を下す。

「素晴らしいっ!! 容姿だけではなくその願いもかつてのわしと相違ないほど似通っているとは……おぬし、わしの隠し子かと一瞬思うてしまったわい!!」

うむうむ。と満足したように何度も何度も頷くオーディン。…アレ？ どこか人を見定めること間違ったかな。さっきまでの威圧が幻想みたいなんだけど……。

反応を見る限り、処刑されるなんてことはなさそうだ。ただ、誘う理由がなあ……昔の自分に似て立って、それでいいのか？ 主神オーディン……。うわっ、左目が光った。無心無心。

失礼なことを考えていたな？ と、怪しむ目にいえいえ、そんなことありませんとあくまで下からの視線で返す。

「ふん、食えぬ男じゃのう。……まあ、いいわい。永遠に匹敵する寿命が欲しいと申したな？ わしの一族となればその願いは叶うだ

ろう。だが、今度は真剣に問おう。

―――神の一族となる覚悟はあるか？ 人間として生きる道も悪くはなからう。永遠という命を得ながらも時代と友に取り残され、ひとり孤独。それに耐え切れるほどの強き心と覚悟を持っているのか？」

その全てが有るのなら名を告げよ。オーデインはそう言い残して瞳を閉じる。左目の義眼からも光が消え失せた。

―――強き心？ そんなもの自分ではわからない。だが、孤独に耐え切れる、だと？ 笑わせるな。孤独になることの覚悟などとうにあの世界で済ませた。だから眠りについた。そして”彼”、契約者の言った言葉を思い出す。

―――王の力は君を孤独にする。

幼かった僕にはその意味は解らなかった。力に溺れ、それを奮ってからやっと気が付いたのだ。その恐ろしい意味に。

母と妹を失った僕は確かに孤独だった。それから逃げるように眠って、そしてまた目覚めて……

人と関わることを傷付けることを恐れて自ら進まなかった、孤独であらうとした僕にあの優しい世界は孤独を与えてくれなかった。そして独りだったら僕にとってあの世界は未だに灰色だっただろう。この世界の色を知りたい。鮮やかな、様々な”色”を見てみたい。そして灰色の誰かに色を教えてあげたい。それが望みだ。だから、告げる―――！

「ライだ。かつて『狂王』と呼ばれた一国の王ではなく、ただのライ。それが僕の……名だ!!」

煌びやかな金と宝石で装飾された鋭利な両刃の長剣の刀身から鮮血が滴る。右側にひとつ、左側にひとつ。計二つの血の線が逆さになった刃を伝い、真下に設置された黄金の杯へと落ちて混ざる。オーデインがその杯、両者の血を先に呑み、それを突き出す。受け取ると、口を付けて飲み干す。それで神一族となる儀式は完了だった。

—————あの日から何年か経った。

雷の神であるトールからは度々酒に誘われてはボロボロに酔ってグ  
ラズヘイムに帰ってきたり、オーディンのセクハラ行為を制止した  
り、悪神ロキの行き過ぎた悪戯に時として付き合ったりと様々な濃  
い年月が経ち、神話外と接触するためである半神としての修業も終  
盤を迎えていた。

学問に関してはこの世界にやってきた時におぼれた泉、オーディン  
が片目を捧げ飲んだとされるありとあらゆる知識の詰まったミーム  
ルの泉の水を偶然呑み込んでしまったため全くと言って必要が無く  
なってしまうていた。……オーディンにはグングニルの平で何回か  
叩かれたけど。

あまり友好的ではないヴァン神族の済む世界、ヴァナヘイムを無断  
で一周させたり、ユグドラシルをアースガルズの根から頂上に居る  
世界の風を起こすという驚の姿をした巨人フレズベルグの元まで登  
って一撃与えてから帰ってくるとか、灼熱の世界であるムスペルヘ  
イムの番人である火の巨魔スルトを倒してその武器を奪ってくる  
かいろいろ修業内容がおかしかった、というかこちらは死ぬ気でや  
ってるのに逃げる僕の姿を見て大爆笑していたロキとオーディンの  
姿を絶対に忘れない。

そして修業もう終る。この試練をこなせば外へと出られる……  
—————終わればの話だが。

「へえ……で、オマエはあのクソツたれなじーさんの試練とやらで  
オレに挑む……っど？」

「ああ、そういうことになるね。聞けば君はオーディンよりも強い  
らしいじゃないか。世界樹を噛むのはそろそろ止めて地上に出てき  
ユグドラシル

たらどうだ？　————ニーズヘッグ」

ニーズヘッグ。目の前に居る巨大な漆黒の龍の名だ。紫色に染まった泉の中心で王のように泉に潜む蛇たちの中心に立っている。

屍竜という異名を持つ怪物の周囲には腐ってからかなりの年月が経ってしまったであろう人の死体や髑髏、骨、武器などが乱雑に散らばっている。この龍に挑んで死んだ者、もしくはニヴルヘイムと呼ばれるこの死の世界に落とされてくる死者だろう。

泉に入っている世界樹の根をかじり、腐らせていくこの黒き龍はロキの造り出した化け物である神喰狼や世界最大級の身体を持ち、五大龍王にも数えられるミズガルズオルムのように神殺しの逸話などはない。それどころか人間を殺したという話もない。

だが、この龍はオーディンさえもうかつに手を出せないほど強大な力を有していることは確かなのだ。

それが世界樹を噛み続けている理由である。  
ユグドラシル

全ての源である樹の根を腐らせ、その力を吸い取るこの怪物は根を噛むことでオーディンを馬鹿にしているのだ。手下であるリスが度々グラズヘイムを訪れてはこう言う。

「オレのご主人様がまた根っこを齧ってるよ！　早くなんとかしないと大変なことになるかもね！」

こうして力を持ちながらもそれを誇示せずに神々を馬鹿にするのがニーズヘッグという龍なのである。北欧の神々なら五大龍どころか、伝説の二天竜にも匹敵するらしい。正直言って勝てるのか……？

いや、勝つ以外に選択肢など残されてない。負けたら死ぬか、一生北欧の神話で生きるかのどちらかなのだ。……勝つしかない。

「お前のせいで困っているのは人間や神どころか世界だ。けど、これはあくまで僕のための戦い。義など持ち合わせてはいない。——だから全力での死合いを望む」

「クククク、嫌いじゃないぜ。そういうの。丁度根っこ噛むのにも飽きてきたんだよ。まア、相手くらいはしてやる全力かどうかは……ニイサン次第だな————っ!!」

黒竜が手を振り上げ、周囲の蛇に指示を出す。沼から飛び出した大蛇は何百どころか何千、もしかしたら何万。数えるのも馬鹿らしい。しかも体長が一体五メートル以上も有る怪物だ。猛毒に犯された泉に住んでいるのだから恐らく毒も持っているだろう。だが、——————所詮は蛇だ。

背中 of 柄を掴み、一気に引き抜く。——————現れる深紅の刀身を持った片刃の刀。それは抜かれるとほぼ同時に真紅と黄金色の炎を纏い蛇の大群を一匹残さずに灰へと帰す。

「……へえ、面白いモン持ってたなア。しかも相当の魔力を帯びてやがる。炎で浮かびあがる武器ったら一つしかねえがそんな細かったのか？ もっと巨大な豪剣かと思ったら少々期待外れだな」

「期待外れ、というにはまだ早んじゃないか？ 日本刀をバカにすると痛いぞ」

一閃。横薙ぎの刃が風を切り裂き、殺意の風を生み出す。一瞬の出来事、黒竜は表情を変えないまま首元へと手を這わせると、自らの血を見た。そして、黒竜の顔が歪む。獰猛に愉しむように、殺意を爆発させた。

ぞくり、と背筋を嫌なお背が伝う。……成程、これが本気かつ!?

「来いよ、相手してくれんだろ? オレも久しぶりに身体が疼いてしょうがねえんだ……今更逃げるなんて無粋なことはいわねえよなア?」

「——————当たり前だつ!!」

得物を一振り。——————炎が再度燈って、巨大な炎剣が生まれ出る。両手で刀を構えなおすと、黒竜が刃のような牙をずらりと並べた口を開けて息吹を吐こうとするその巨体へと吹き出す炎で加速しながら脚力の使用に全神経を使って駆けた。そんな中でふと、思い出す。そういえばこの戦いが終わったらオーディンが専属のヴァルキュリアを付けてくれるって言ってたな……。





## 狂王の契約（後書き）

とりあえずアースガルズサイドはそろそろ終了です。ヒロイン候補が次辺りに出てくるかな……？感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## 狂王と銀髪の殲滅女王

漂う血の臭いと砂ぼこり。そして元は森であつたろう場所は荒れ果てた荒野となり、何もない灰色の光景が広がっている。街は破壊され、廃墟となりこの場所へと人が戻ってくることはまずないだろう。あの世界のトウキョウ租界シンジユクゲッターと比べてもこちらの方が悲惨だった。

「つくづく、嫌なことを思い出させるよ。こんな風景は……」

王として君臨していた時代の終わり、叫んではならない命令ギアスを使つて市民も兵も関係なく戦場へと出たその時のものとこの場所は限りなく酷似していた。

結果として悪龍ニーズヘッグを討伐し、試練を終了させたため神話外への接触の許可が与えられた。様々な世界を回るといふ目的の中で一番興味を持ったのが『冥界』と呼ばれる紫色の空の世界。まさしく此処だった。

元々は四大魔王であるルシファー、レヴィアタン、ベルゼブブ、アスモデウスという悪魔たちが支配していたこの地では展開との戦争が勃発。魔王と神が争い、互いに死亡。そして天使、悪魔は互いに疲弊状態にあるという。

見下ろしている丘の崖の下を覗きこめば白い羽根や黒い羽根。そして蝙蝠のような羽根を有した死体がいくつも横たわっていた。……全て人間と相違ない姿をしている天使や堕天使、悪魔の死体は戦争

の残酷さを物言わずとも伝える。そして、その虚しさも……

オーデインの話によれば仕えるべき主を失い、天使と悪魔は種の存続に関わるほどその存在が危ぶまれている。…だが、旧魔王の一族やその眷属たちはあくまでも最後の一人となるまで天使を根絶するという徹底抗戦を唱えているのだ。いわゆる過激派や行動派という団体のようなものだろう。

やはりそのような者たちがいれば逆も然り。天使などと交戦している場合ではない、種の存続を第一に考えろと、旧魔王派に異を唱える者たちもまた存在するのだ。

同じ種族が殺し合い、故郷の大地へと血を染み込ませていく。…いつの時代でも戦争というものは無くならないものだ。

「—————あれは……？」

眼下の戦場、その何キロも離れた地。遠目にしか見えないが、そこで何かが光った。

それは戦いの光。慈悲もなく、敵とみなした者を殲滅する無頼な閃光。そして、蟻の大群のような悪魔たちの咆哮が遠く離れたこの丘まで轟かせ、空気を震わせる。

ちくり、と針が刺すように胸が痛む。かつての僕なら「他人事だ、見知らぬ者たちがいつどこでどのくらい死のうが関係ない」と何も感じなかっただろう。

—————だが、僕は随分と甘く…お人良しになってしまったらしい。

力のみが全て。強者が生き残り、弱者は喰い殺されるというブリタニア帝国の礎を築いた”狂った王”が同族同士の戦争に介入なんて笑い話にもならないだろう。

しかし、もう僕は狂王ではない。神の一族に名を連ねると決めたその日から、この世界の歴史に存在を一切として残していない僕はあくまでただのライ。そう、あの世界ではブリタニア皇族と皇の血<sup>すめらぎ</sup>を継いでいる存在だとしてもこの世界では何の価値もない。それこそ神の血が半分流れている

ということさえ無ければ何の肩書のない普通の人間だろう。……だから――――！

旧魔王派と反魔王派との全面的な戦争は紫色の空の下、その勢いを激化させていた。

魔術が悪魔と大地もとも吹き飛ばし、武器が敵の胸を突き破る。血飛沫を浴びて武器を手に進む悪魔の戦士たちは武器を奮い敵を切

り捨て、また切り捨てられる。

冥界という場においても地獄絵図といえるだろうこの光景は戦争が継続している限りはまた生まれるだろう。

「…やはり、あまり気分のいいものではないですね。戦争は……」

旧魔王派閥陣営の前線で敵軍へと攻撃をしながらも指揮をする女性悪魔がひとりごちた。

煌びやかな艶のある美しい銀髪を揺らし、掌から魔力の波動を放つ。それだけで何十人も敵軍兵士が大地と共に断末魔を残して吹き飛んでいく。圧倒的な力で向かう敵を撃つ女性は冥界でも名門と言われる家系の娘だった。

———グレイフィア・ルキフグス。旧魔王の頂点ルシファーに仕えていた上級悪魔の家系の長女である女性悪魔の名だ。

魔王の中で最も力を持つルシファー眷属の中で最右翼のルキフグス家の血筋、そして何より彼女の長年の鍛錬の賜物であるその力は下級悪魔では何体集まろうが歯が立たないだろう。

———今は戦争中で自分は前線を担う軍人。敵を殺すのは当たり前だ。

容易く吹き飛んでいく敵兵を見て、心が痛むがグレイフィアはそう割り切っている。

同族を殺すのは嫌だ。しかし、殺さなくてはならない。……だって私は旧魔王ルシファーに仕える存在なのだから。

ルキフグスの家に生を受けた以上、その忠義は絶対だ。ルシファーの敵となる者を排除し、主人の理想とする世界を作り出す。それが運命であり、覆すことなど不可能で敵が居なくなるまでこのまま延

々と作業のように同種族を殺していくだろう。

「――反魔王軍の前線が崩れていく……状況はわずかではあるが、旧魔王軍の方が有利であった。元々強大な魔力を持つ魔王の子孫が参戦しているに加え、名門貴族の悪魔が旧魔王軍の方が多い。比べて反魔王軍には英雄と呼ばれる悪魔がいるこそすれ、それだけだ。一人二人の英雄がいる軍隊とそれには劣るが、強大な力を有した兵が多く存在する軍では後者に軍配が上がるだろう。

……だが――

「――なっ!?!」

そこに異端な存在イレギュラーが現れたらどうだろうか？ たった一人でも軍隊と争えるほどの圧倒的力を内に秘めた存在がその場に現れたとしたら……？ もしかしたら戦況は一気に覆ってしまうだろう。

1／649740の確率でしか出ない必殺の手が1／4165の強打に異端者ジョーカー加えるだけで勝敗が逆転するように――

「あれは……一体……?」

グレイフィアは敵も味方も見上げている空へと視線を上げる。いつもの紫色の空に異端が一つ。

三十メートルは優に超しているであろう炎の塊。だが、それは翼を羽ばたかせ、爪を有する炎で形成された巨大な鷹だった。

一瞬フェニックスとも錯覚するが、そんな筈はない。ここまで巨大な悪魔は存在しないし、魔王にも匹敵するかのようなその威圧感が違いすぎる。遙か上空に居るというのに太陽が直ぐ其処まで迫って

いるかのように熱気が辺りを支配し全ての悪魔を釘付けにしていた。

そして、それは突如として――――――落ちた。

「なっ!?!?――――――くっ!?!」

ゴオオオオオッ!!と燃え盛る朱雀は悪魔たちの戦う地へと突き刺さり、一気にその翼を広げていく。炎に包まれる前線で戦う悪魔の大群。グレイフィアは落ちた直後に反応して防御魔術を展開して防ぐが、その熱気までを防ぐことは容易ではなかった。服に火でも付きそうなほどの熱気がグレイフィアを包み顔が歪む。

朱色と黄金色の炎が視界を遮り、前が見えない。おそらく敵も仲間もろともあの鳥は焼き尽くしているのだろうと予想は安易に出来た。しかし――――――

「!?!?……一体、どういうことですか、これは……!」

開けた視界でグレイフィアが見た光景。それは敵も味方も、炎に包まれていた前線が丸ごと削られていた様だった。そして、旧魔王軍と反魔王軍の境目に立つようにして先ほどまではそこに居なかった異端、少しくすんだ銀髪の少年が存在していた。





## 狂王と銀髪の殲滅女王（後書き）

中途半端なところで終わらせてすいません。さて、とりあえずグレイフィア登場の回です。……ライとはほとんど関わっていませんけどね。

休日中に一回は更新できたらと思っています。感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## 狂王の宣告

戦場は戦場とは思えないほどの静けさに包まれていた。旧魔王、反魔王軍は両軍ともに争いの手を止め啞然としている。

……まあ、当然か。突然炎の鳥が上空から落下して戦争中の両軍前線を丸ごと削り取ったのだから驚かない方が以上だ。おまけに両軍の境目に見覚えのない人間がいつの間にか存在していたら尚のこと。

さて、前座は整ったかな。いい具合に戦況は混乱しているし、強力な力を有した悪魔以外は僕に恐怖を抱いただろう。何せ、千以上の仲間や敵が一瞬で消え去ったのだから。開幕は此処から、芝居は得意ではないけど、演説には慣れている。

「————旧魔王および、反魔王軍に問う。……貴様らは馬鹿か？」

————何っ！？旧魔王、反魔王軍の両軍から二つの声上がる。確実に上級の悪魔だろう。それだけにプライドも高い。というか、いきなり現れた若造が開口一番に「馬鹿か？」などと問うたら憤るのは当然だろうし、それでいい。

左、反魔王軍を見ると、啞然とする悪魔をかき分けて紅の髪が特徴の青年が前へと出てくる。確実に声を上げた一人なのだろう。威厳のあるその歩みと強き意思を読み取れる瞳はどこか、王たる存在の風格を感じる。

右、旧魔王軍では前線で生き残ったのだろう。僕の灰色のような髪とは違う、鮮やかな銀髪。冷やかな印象を焼き付ける瞳の女性が仇を見るような眼で睨みつけていた。歳は片方の青年と同じくらいで見た目だけなら僕とも変わらないだろう。

「————馬鹿、と言ったね？ 君は。それ以前に突然現れて部下を消しておきながら名乗りもしないのはどうなのかな？」

「悪魔に神が名乗る名など有るのか？ 紅の悪魔よ。冗談も対外にした方が身のためだぞ」

なんだとっ！！と物腰丁寧な口調で尋ねた紅き髪の悪魔にそう冷やかに見下した様子で返す。

おそろしいほど冷たい声が出るものだ……我ながら。何百年たっても王として慣れてしまったものは抜けないのかもしれない。そう思っている内に、神っ！？と驚愕が啞然としていた下級悪魔たちに広がり、畏怖と怒りを伝染させていく。計算通り……

悪魔は”神”という言葉に強く怒りを感じる。それが上級であれ、下級であれ。旧魔王派だろうが新魔王派だろうが、その点は変わらない。自らの同胞と仕えるべき君主を殺した存在を彼らが忘れるはずなど無いのだ。

憤る反魔王のエースを鼻を鳴らして一瞥し、旧魔王の女性へと視線を移す。当然のごとく、美貌を歪めてこちらを睨みつけていた。それこそ肉親を殺した相手を見るように。

「神と、そう仰いましたか。あなたは？」

「そうだが。何だ、貴様も先ほどのように名乗れと申すか？　だっ  
たら――――」

「いえ、……では、何の躊躇もなく殺せるというものですっ！！」

ゴオッ！！　轟音を立てて強大な魔力の奔流が女性の掌から放たれる。遠目で見たものとはけた違いに大きいっ！？

一瞬で反応し、腰に差す諸刃もろはの刀を抜刀して光弾を切り裂くが手応えがない。刃に光が触れた瞬間にそう感じ取り、すぐさま刀身に炎を伝道させ斬るのではなく、抹消する。

膨大な魔力の塊である光弾は朱色と黄金色の炎に浸蝕され、その力を失い消え去る。

…あ、危な…っ！？　さっきのかなり拙かった。一瞬で反応してなかったら消し炭になってたのは僕だって……！？　消し去った時に「ふん、こんなものか……」って偉そうに鼻で笑ったけどホントはかなり焦ってます。…ちよっと怒らせすぎたかな。でも、今更引けないし…

「今、蚊のような攻撃が飛んできたが、貴様か、小娘？」

「……そうですが、何か？」

「――――― 儂いな、貴様の魔力もその存在も」

「……なっ、それはどういうことですかっ!? 私の努力が、家が、私自身が儂い、と? ルシファー陛下に仕える最右翼、ルキフグス家の長女であるあまり私を馬鹿にするのもいい加減にしていたきたい!!」

見下した表情と口調の僕に当然のごとく女性は怒りを表す。だが、止めない。この場で”悪”になるためには相手をとことん見下して、そして殺してやりたいと思わせるほど醜悪になるしかない。だからこそ僕は彼女を見下し続ける。

「ルシファー陛下の最右翼? ルキフグス家? 関係ないな。神である私にとってたかが貴族の一悪魔が勝るとでも? それに貴様は結局家の使命とやらに縛り付けられているだけではないか」

「―――――っ!? 一体どこまで……!」

「事実ではないか。上空から見ていたが、貴様の顔はどうも戦士のものではなかったぞ? 嫌々敵を殺して、それを家の使命だ、その家に生まれたことが悪いのだと本当は敵を殺したくないと思う自分を抑えつけながら、偽って……それでも殺すことを止めない自分を正当化していたのではないのかっ!?!」

「……どう、して……！　くっ、……私は……」

それきり黙ってしまふ女性。……少し、素が混じってしまったけど  
なんとか誤魔化せている。

さて、芝居もそろそろ終盤だ。次の瞬間でこの場は一気に騒然とする  
だろう。僕を睨む反魔王軍のエースも一秒と待たずに襲いかかっ  
てくるだろうし、他の悪魔も黙るなんてことは有り得ない。

……もしかしたら死ぬかも知れないな。けど、全て台本通りの芝居  
で僕とこの場の全員はその役者。そして脚本家は僕で今のところシ  
ナリオに変更はない。口を開く、この場において敵は旧魔王軍でも  
反魔王軍でもなく————この”僕”だと、認識させるために  
……！

「——さて、前置きが長くなったが、私がこの場へと参上した。  
理由は一つだ。『馬鹿か？』と私は初めに問うたな、反魔王の紅き  
悪魔よ」

「……ああ、そうだな。で、カミサマがわざわざ冥界にまで来た理  
由ってのはなんなんだい？　死んでから転生して悪魔の王にでもな  
るとでも言うつもりか？」

「——違うな。間違っているぞ、紅の悪魔よ。何故私が魔王な  
どになって悪魔たちを統治し、繁栄させなければならぬ？　むし  
ろ、その逆だ」

「逆……？ まさか、貴様が『馬鹿』と言ったこの意味は……！」

反魔王軍のエースは気が付いたようだ。そう僕がこの場に介入した表の理由。それは――――

「貴様らを破滅させる存在が近づいているのにそれにも気付かずに、同種同士で争っている。だから貴様らは愚かで馬鹿なのだよ。冥界に住まう全ての悪魔に告げる。――――貴様らはここで滅びよ」



「――――殺せ！ 我々の敵たる神を殺せっ！」

悪魔の大群が咆哮し、突撃する。その数は数えるのも馬鹿らしい。走る悪魔たちの脚が地響きを起こし冥界の大地を揺らす。反魔王、旧魔王軍と両軍が戦争などしている場合ではない。一瞬で前線を消し去った破壊の化身、神が居るのだ。何としても殺さなくては、殺して生き残らなければ！

そんな考えの中で戦うのだろうか、彼らは。しかし、ここまで怒りを誘発するとは……役者として優秀すぎるのも考え物だ。

雪崩のように押し寄せる両軍は丁度僕の横を全てふさいでいる。逃げ場はない。だが、逃げる気もない。ここまで負の怨嗟を撒き散らした事の責任は取るさ。

「――――レーヴァテイン セカンド・シフト 神炎剣、弑式解除」

右手に持つ刀の力を解放し、それを変質させる魔の言霊を紡ぐ。それを聞き遂げ、右手に持つ紅き刀身の刀、九つの世界を滅ぼし最終ナログ戦争に終わりを齎す災厄の武器『レーヴァテイン』が変質していく。

柄は広がり、右腕を全て覆う様な鎧へと変貌し、刀身は五つに分裂して中折れするように刀身の半分が歪に傾く。――――そして五つに分裂した刃は広げた掌のような形に広がった。

――――それは巨大な深紅の右腕。

――それは敵を切り裂く凶悪な魔刃。

――それは敵を焼き尽くす灼熱の権化。

天へと刀、右腕が一体化した巨大な猛禽の爪を模したような形の異形を掲げる。そして、感触を確かに掴むと、地響きを起こして揺れる大地へと――叩きつける！

刃の爪の中心、掌から魔力の波動を発生させ、地へと伝える。紅き波動が送り込まれると、その場は一瞬静寂へと変わる。異変を感じ取った悪魔たちが警戒してその歩みを止めていた。

また空、から来るのか？　とでも思っているのだろう。けど、その反応は間違いだ。

ゴポ、ゴボボボボボボボボボツツ！！！！

何かが噴き上げてくる様な音と共に僕のいる場以外の地面が隆起する。そして噴き出す火柱。

天にも届く火柱は一柱出現すると、それを革切りにして何十、何百と地面を割って噴き出し悪魔を焼いていく。かろうじて火柱を避け、消し炭となることを免れた悪魔も地割れに吞まれ、奈落へと落ちていく。……自分で興しておいて何だが、まさしく地獄絵図という言葉が相応しかった。

「カレン、君の力をこんなことに使ってごめん……」

異形と化した右腕は紅蓮式式という機械人形の右腕によく酷似していた。蒼き月下と双壁と呼ばれた深紅の右腕が少し小さくなっている。使用によってその形を変える『レヴァテイン神炎剣』のもう一つの姿。自分の浮かぶ、最高の相棒を浮かべた結果だ。

しかし、その初陣が悪魔たちにとっては虐殺ともいえる行為だということは本当に申し訳ない。

おっと、気を抜いている場合ではなかった。下級悪魔の大半は戦闘不能に出来ただろうけど、まだ上級悪魔の大半、いや全て生き残っているだろう。それら相手をしなくては……

魔力を集中させ、背中へと炎の翼を形成する。十メートルは軽く超すそれを羽ばたかせ、上空へと飛び上がる。戦場が此処からならよく見える。

やはり反魔王軍のエース、紅の髪が悪魔も、旧魔王軍の女帝、銀髪の女性悪魔も無傷。同じく蝙蝠のような翼を生やして同じ空へと駆け上がった。

「……君の真意はどうであれ、僕の部下たちを傷付けたことを黙認するほど、僕は寛容ではない。すまないけど、捕えさせてもらうよ、話はそれからだっ!!」

「あれほど、妄言を申したのです。それ相応の罰は受けてもらいます。泣いて懺悔して後悔しないように……っ!!」

「————クハハハッ!!」  
それでいい、それでいいのだ!!  
同種の争いなどつまらないことをしてないで真の敵を見極められない愚かな貴様らに慈悲をくれてやった私に感謝するがいいっ!!

そして刃を向けろ、己の武器たる手を掲げろ！ 敵とみなした存在にすることは当然。だが、貴様ら私は黙って淘汰されるつもりはない。—————撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ！  
」

火の粉を撒き散らし燃える翼をはためかせ、右腕を天へと掲げながら僕はそう高く宣告した。

## 狂王の宣告（後書き）

次回はライくん無双ですね、はい。

グレイフィアさんを虐めてすいません、ホント。……でも私、好きな人ほど虐めたくなんです。まあ、実際にはしませんが。感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4118ba/>

---

狂王の異界黙示録

2012年1月15日01時29分発行